

第3回 淡路夢舞台のあり方検討会 議事概要

- 1 日 時 令和7年12月1日(月) 15:00~17:00
- 2 場 所 県庁3号館6階第1委員会室
- 3 説 明 (1) 淡路夢舞台の創造的再生に向けたあり方検討 最終報告(素案)
(2) 淡路夢舞台の創造的再生に向けたスケジュール

4 意見交換

(1) コンセプト・理念・ストーリー

- 最終報告(素案)の全体コンセプト「自然と人が響き合う新たな交流と創造の拠点」は魅力的であるが、自然要素として水や光、風などは記載されている一方、緑や周辺環境への言及が少ない。国営明石海峡公園を含め、近接エリアの特徴を反映し、緑を取り入れた表現があってもよいと考える。
- 「大阪関西万博終了」は「閉幕」とすべきであり、IRだけでなく夢洲全体が国際観光拠点になる旨を記載することが望ましい。また、ジャパンプローラの記載が抜けており、土取跡地開発の理念を語る際には必ず触れるべきである。
- 現在は「創造的復興の象徴」や「大阪・関西万博のレガシー」が記載されているが、本来この場所は、関空のみならず阪神間の埋め立てによってけずった山を再生してきた歴史を持つ。そのため、自然を守る場ではなく、自然を再生してきた「ガーデン」であるという物語を示す方がいい。最後に「淡路全体の比類なき自然」と記載されているが、この場所の価値は「再生の歴史」にあるため、そこを強調し、理念として継承する構成にするべきである。
- 資料タイトルは「淡路夢舞台の新しい価値創造」と明確なエリアを示している一方、全体コンセプト「自然と人が響き合う新たな交流と創造の拠点へ」は、拠点が淡路夢舞台なのか淡路島なのか不明確である。具体的な地名を記載することでインパクトが増し、事業者にとって理解しやすくなる。また、資料全体で淡路夢舞台・淡路島・大阪・神戸・瀬戸内と視点が混在しており、エリアの解像度を高める整理が必要である。
- 時代背景が書かれたページについては、現状では個別の文章が並んでいるだけで、全体の意図が伝わりにくい。整理の方向性としては、次の三つの観点を明確にすることが重要である。
 - ・第一に、価値の変化を示すこと。従来の価値から新しい価値へどのように移行しているかを説明する。
 - ・第二に、状況の変化を示すこと。大阪湾の開発、IR、神戸空港など、社会・経済環境の変化を具体的に記載する。
 - ・第三に、環境の変化を示すこと。自然再生や気候変動への対応など、環境面での変化と、それに先駆けて取り組んできた事実を強調する。
- これらを整理することで、後半の構成もわかりやすくなり、さらに「先見性を持って取り組んできた」という点をアピールできる。気候変動への対応は現在非常に注目されているため、この視点を強く打ち出すことが効果的である。
- 今回の取組は、ゼロから新しく始めるものではなく、これまで積み重ねてきた取り組みの延長線上にあることをしっかり伝えることが重要である。

- 全体コンセプトは価値のあり方や方向性を示し、再生のキーワードは広義の「デザイン」として「行動」も含む概念である。方向性と行動レベルに分解し、「つなぐ」「つどう」「つくる」を順序や意味づけで整理し、それぞれが何を生み出すかを明示すべき。
- 「つどう」「つなぐ」「つくる」は再生のアプローチ、すなわち目的達成のための手段であると考えられる。
- 既存の「共生」の概念を否定するものではないが、そこから「共創」へ進化する方向性を示してはどうか。イントロダクションにある「人と自然の共生から未来を共創する舞台へ」という宣言のように、何から何へという変化を明示する表現を加えることが望ましいと考えている。
- 今回の取り組みには「淡路島を通じて、県、市町村、外部の人々などが関わる新しいタイプの共同プロジェクトを作りたい」という意図を感じている。
- 県は「並走していく」という姿勢を示しており、みんなでイコールパートナーとして進めることを目指していると理解している。これは共同型の「公民連携」であり、表紙のパートナーシッププロジェクトという表現は、その願いを反映しているともいえる。
- 観光戦略との整合性・親和性が気になっていた。エリアバリューとして、大阪や西の瀬戸際エリアとの結節点に位置し、神戸空港直行便により神戸とセットでプレゼンスが高まっている。コンセプト面では、新観光戦略と同様にオーバーツーリズムを防ぎつつ、上質で本物の体験により消費額を向上させ、地域の活性化につなげる点で合致している。
- 海外から見た淡路島のポテンシャルは高い。近隣アジアでは東京・大阪・福岡に飽きたリピーターが「手垢のついていない」地域を求めており、淡路島は旅行会社でも認知度が低いが、「ルーツ・オブ・ジャパン」として関心を集める可能性がある。欧米豪では兵庫すら知られていないが、日本的な深い文化体験への需要が強く、淡路島の認知度向上とブランディングは観光面からも重要である。近距離・遠距離双方に可能性を有する地域と思って聞いていた。

(2) タイトル・構成・メッセージ設計

- タイトルには「淡路夢舞台」を明記し、「淡路夢舞台からはじまる新しい価値創造」が適切だと思う。委員会名や「最終報告書」「基本方針」などの行政的表記は、下部に配置する方がよい。
- 全体として、文章が長く重複している箇所が多いため、7～8割程度に整理し、簡潔にすることで初見者にも伝わりやすくなる。特に、イントロダクションやバックグラウンドの構成は再考が必要。
- 「つなぐ」「つどう」「つくる」という三本の柱を立てるのは良いが、ページ構成を簡潔化し、メッセージをダイレクトに伝える工夫が必要である。
- タイトルは、「淡路夢舞台からはじまる新しい価値創造」とすることで狙いが明確になり、淡路夢舞台の位置づけも示せる。さらに「はじまる」は広がりを含意し、英語の「Awaji Future Stage」とも整合する。

(3) エリア像・アクセス・広域視点

- PROJECT OUTLINEには、二つの視点を追加することが有効と考える。
 - ・第一に、淡路島北部にフォーカスし、各施設の関係性や相乗効果がイメージできるようなスモールスケールのアウトラインを示すこと。

- ・第二に、瀬戸内海や直島まで広がる広域的な視点を取り入れ、「つながる・巡る」というイメージを伝えること。
- 現状は大阪・神戸からのアクセスに視点が偏っている。淡路島を中心に、時間距離や国際的なアクセスを示す図が必要である。
- IRだけでなく夢洲全体が国際観光拠点になる旨を記載することが望ましい。
- 「地域と世界をつなぐ」という視点を強化し、国生みの物語を新たなコンセプトとして活用することが望ましい。
- 地図の配置や広域視点の不足も課題であり、国内外の投資家に向けて、位置関係やアクセスを明確に示すページが必要である。

(4) 事業者・投資家への伝達／官民連携・実行プロセス

- 兵庫県の淡路夢舞台・淡路島に対する政策的コミットメントを明確化するため、基本方針や観光戦略へのアクセスを容易にする工夫が望ましい。
- 言葉だけでなく、データに語らせる部分も適度に取り入れるべきである。
- 報告書の概要版を作成し、要点を簡潔に示すことが重要である。
- 関心のある事業者への情報提供方法について、戦略的な検討が必要である。
- 「新たな施設所有者に求めること」は、現状ではやや具体性に欠けている。ただし、過度に縛ると柔軟性を損なう。前半部分で各委員が指摘したような基本的な方向性や理念を明確化すれば、事業者にとって「自分が何をすべきか」がより理解しやすくなると考えられる。
- 今回は従来のように「構想→計画→事業化→運営」という上から順番の進め方ではない。民間とのパートナーシップを活用しつつ、単なる事業化だけでなく、アクティビティベースで価値を創出しながら、ハード面の建設や運営の更新も並行して進める必要がある。
- 次の公募に委ねる部分もあるが、今は「ビジョン」と「ガイドライン」を示し、共通目標と行政の役割を明確化するだけの計画が増えている。何を目標、共通目標（上）にして、行政はどう支えるか（下）を示し、事業領域は公民で共同しながら柔軟に進めるのが世界的な潮流である。
- 拠点という表現は海外の投資家に対し、セントライズドモデルを想起させる可能性がある。淡路夢舞台を強調しすぎると、提案が限定的になり、逆に全体を求めると公共性が過度に要求されるため、バランスの取り方が重要である。
- IDEAL STATE のメッセージは非常に重要であり、構成上のメリハリをつけて強調することが望ましい。ここに最後つながっていくといった構成にしたら良い。
- 「ポテンシャルと可能性」は民間事業者にとって重要な情報であり、より分かりやすく整理することが求められる。また、環境未来島構想のブランドイメージを全体に浸透させることで、価値がより伝わると思う。
- 全体の議論の中で最も重要だと感じるのは、「良い事業者」というフレーズである。これは「新たな施設所有者に求めること」に記載されている「共創のパートナー」という考え方に直結する。具体的には、①県と共存パートナーとして協働できること、②地域社会とともに発展させること、③世代を超えて誇れる場を創出すること。この三つを満たす事業者こそが「良い事業者」であり、逆に満たさない事業者には来てほしくないという強いメッセージを打ち出すと良い。このあたりを公募要件に落とし込む作業は難しいが、この考え方を軸に、メリハリをつけて記載することを検討すべき。

- 私の考えは、まず広く提案を受け止め、そのうえで、審査段階で必要な要件をしつかり確認すればよいというものである。つまり、提示する段階では「基本構想」として方向性を示し、公募時には要項や考え方を通じて、実際の提案に向けた具体的な条件を設定するという二段階構えが適切だと考えている。
- ベイエリア活性化の基本方針は現時点で見直しに至っていないが、プロジェクトのあり方については万博後の次の5年を見据えた議論が必要と思っている。今回の淡路夢舞台のコンセプトを踏まえ、淡路夢舞台の場所に加え移動のあり方なども含めて見直しを進める方針である。今後、このコンセプトと一体的に検討していく。
- 初見では良い印象を受けつつも不明瞭な点があったが、今日の議論で課題が整理され、内容がより良くなると思う。